



[ZAMBIA]

マザブカ地区伝統畜産農家開発プロジェクトの報告。

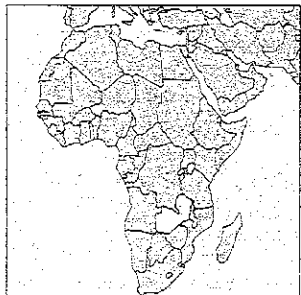
ある家族は、100頭のうち20頭を雨季のわずか1カ月間に病気で失っている。それだけの牛を飼っているのに人々には牛の健康管理という意識が極めて低い。家畜に依存して生きる牧畜民の多いアフリカにあって、この人々はどう見ても家畜の素人に違いない。それなのになぜこの人たちが牛を飼うようになったのか？ 彼らは牛を他人に売るということをしていない。なぜなのか？ 社会学、家畜飼育、獣医からなるチームは、家畜と村落社会とのかかわりのルーツを探ることから、この国の畜産振興の方法を見出そうとしている。

牛はなぜ増えた。

社会学の高田隊員のキャンプのそばを、
村の少女たちが飲み水を運んでいく。高田隊長は
村人と牛のかかわりを調査するために、
牛園に近いこの場所にテントを張ってすでに6カ月間
調査活動を行っている。
調査はさらに6カ月間継続される予定だ。
牛は彼らにとって簡単に処分できるようなものではなく、
財産として世代から世代に受け継いでいくものだ
と村人たちは考えているという。
テント脇にある死んだ牛の頭骸骨は、
高田隊員がイスがわりに使用している。

[生活]

いかに!



派遣職種●マザブカ地区伝統畜産農家開発プロジェクト
このプロジェクトは、5年間の活動期間を設定して
1989年に開始された。プロジェクトの最終目標は、
畜産振興であるが、活動は、家畜衛生対策、マーケティング、
家畜の放牧状況、村の構成、社会構造、
生産様式の調査など多岐にわたっている。
牛を売りに行かない農民の意識調査、意識変革が
プロジェクトのカギである
ザンビア●人口756万人(87年)首都ルサカ。
共和制。元首はK・D・カウンタ大統領。
公用語は英語。住民はバンツワ族が大多数を占める。
宗教は伝統宗教多数。他に、カトリック、ペンテコステ派など

農民たちの、意識変革にはほど遠く。

ザンビア行きの便を待つケニアのナイロビ空港で顔見知りとバッタリ出会った。在東京エチオピア大使館の書記官で、ザンビアにいる友人に休暇で会いに行くところだという。ザンビアはどんな国なのかとたずねてみたが、彼も初めてでまったく知らないのだという。

2時間半の飛行で機が着陸体制に入ると、エチオピア外交官氏は窓にかぶりつきになって下界に見入っている。「ビューティフル!」「ビューティフル・カントリー!」……「インクレディブル!」……といった感嘆の言葉を連発しだした。——なるほど、これまでアフリカでは出会ったことのない水気の滴るような緑野が下界には開けていた。外交官氏の異状な興奮ぶりに、たび重なる旱魃でうちのめされ、疲弊しまったエチオピアの国土をオーバー・ラップさせて視ているようすがうかがわれた。

どこまでも続く緑の丘陵の片隅で、農民たちはわずかなトウモロコシを栽培している。ザンビアは慢性的な食糧不足を、外国からの援助でしのいでいる。地平線まで続く砂糖キビ農園がひらけているのに商店には砂糖がない。また、膨大な数の牛が飼われていても都市での肉不足は慢性化したままなのだ。ニジュールやエチオピアの農民が見れば、びざまづいて口づけしたくなるような恵まれた国土であるのに、閑散とした市場には貧弱な玉ネギとトマトくらいしか並んでいない。物が流通している気配がないのである。

この国は豊富に産出する銅鉱石で潤ってきた。農業など放置したままでも銅が国庫を支えてきたのだ。それが、長びく銅価格の低迷ですっかり歯車が狂ってしまった。激しいインフレが続くなか、経済は危懼的状况に陥っている。いまや労働者の日当はビール1本で消えてしまうといった状態なのである。この国は銅一辺倒から、農業開発への転換を早急にせまられている。

ザンビアの首都、ルサカの南120キロにマザブカという地区がある。ここに6人の隊員が張りついて悪戦苦闘を続けている。マザブカ地区伝統畜産農家開発プロジェクト。

この地区の農家では数十頭から百頭前後の牛が飼育されている。ところが肉牛として売るわけでもなくただ財産として所有しているだけなのだ。結婚式の代償や、娘の成人式な

どの折に屠殺する以外に普段食用に屠殺することはない。牛に関する知識は乏しく、毎年多数の牛を病死させているのである。

プロジェクト・チームの課題は、農民たちの意識を高めて、やがては都市の食肉不足解消までの橋渡しが出来るか否かというところにある。チームの構成はそれぞれ2人の社会学者、家畜飼育指導、獣医師から成っている。牛と人間との社会的つながりの解明から手掛けていく草の根的な実験段階である。

ザンビアでは、他では見ることのできなかつたアフリカのもうひとつの顔と接することができる。それはザンビアが北ローデシアであったころから居残る白人農業経営者たちである。3000~4000エーカーというケタ違いの土地を所有し(現在土地は名目上は国有化されていて、わずかばかりの使用料を毎年政府に収めている)、何百頭という肉牛、乳牛を飼っている。食肉、穀物ともに、この国の農産物の安定供給の基礎を成しているのは彼ら白人たちの農場なのである。白人たちは何十家族という黒人労働者を敷地内に住まわせ、彼らの子供たちの学校まで開いている。家畜は完璧にケアされており、おびただしい農業機械が稼働している。彼らの何人かは自家用飛行機を持ち、敷地内に滑走路まで敷く仕末で、まるで独立王国といった趣きである。

その外側、雑草の生い繁る草原の片隅で、小屋に住みボロを着て、わずかばかりのモロコシを栽培し、牛を財産として生きている現地農民たち。あまりの落差に溜息が出る。

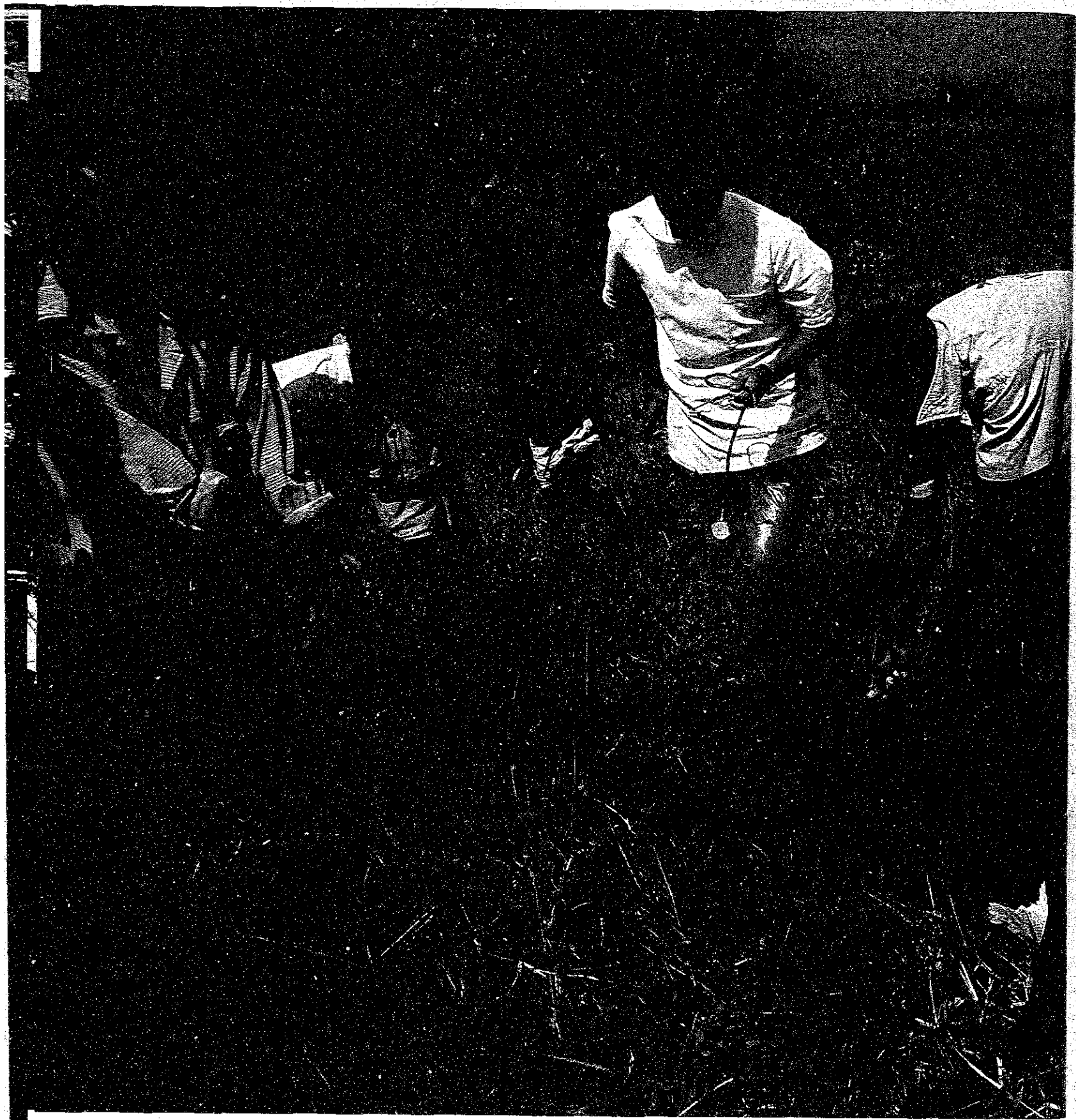
さまざまな見方があろうが、もしこの白人たちが去ってしまえば、この国の農業生産は相当のダメージを受けるであろうことは素人眼にも明らかなことだ。

マザブカでは、日本のある団体が白人経営の農場のひとつを買ったということが話題になっていた。土地は国のものだから売買されたのは経営権であるが……。正直なところ土地にからむこういう話を聞かされると、ジャパン・マネーはついにアフリカにまで進出したのかと呆れてしまう。

日本人が買い取ったという農場に行ってみたが、日本人は居らず白人マネージャーが取仕切っていた。経営者不在のままでは、喰いものにされるのがオチだと、周囲のうわさであった。

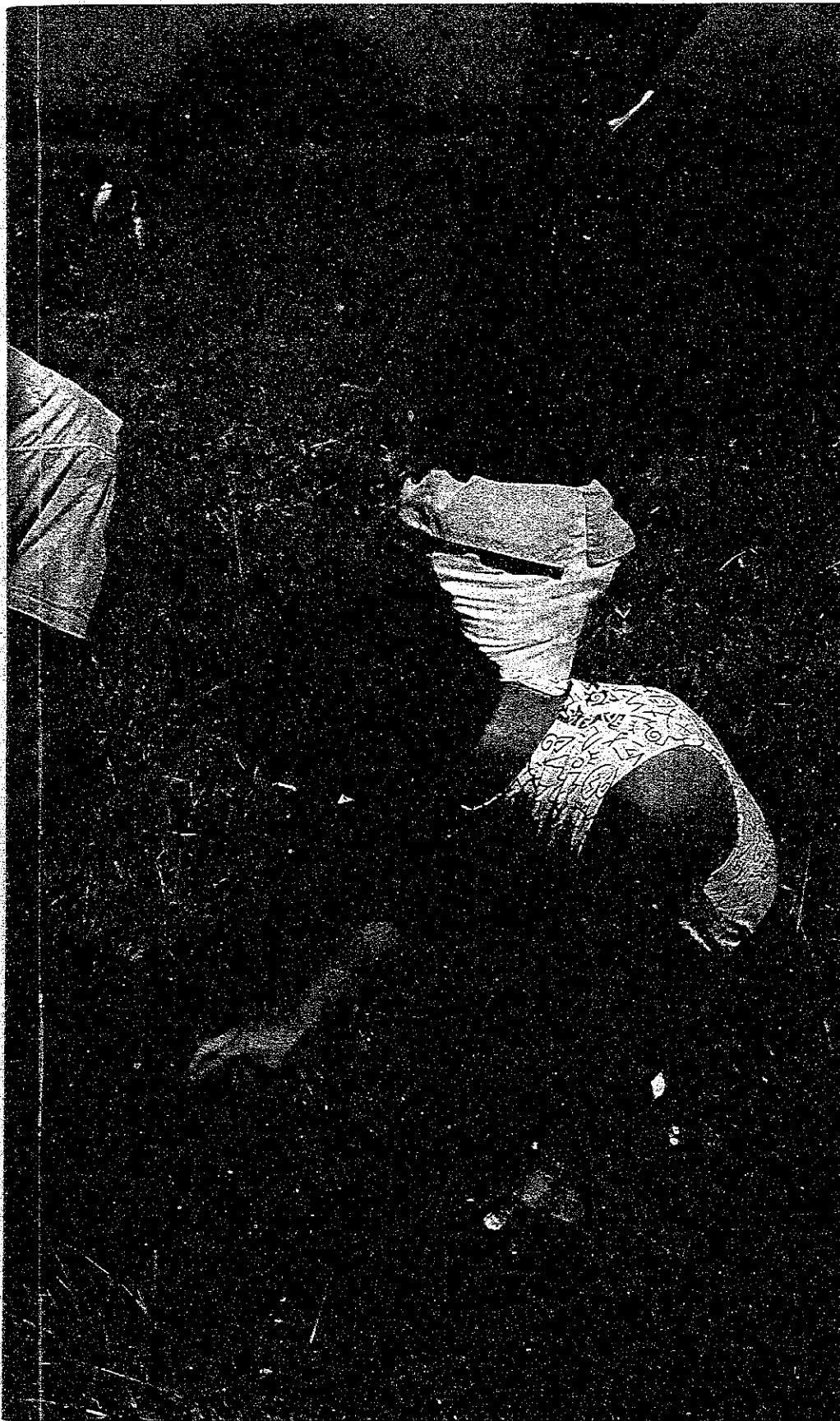
[高原の朝]

標高1300メートル。
マザブカ地区のある、ザンビア南部には豊かな土地が広がっている。
だが農民たちはごく一部の土地で、自給に足るだけのトウモロコシを栽培しているだけである。
草ぼうぼうの荒地のなかには、白人入植者たちが去ったあとの墨園跡がそのままに放置されているところが少なくない。



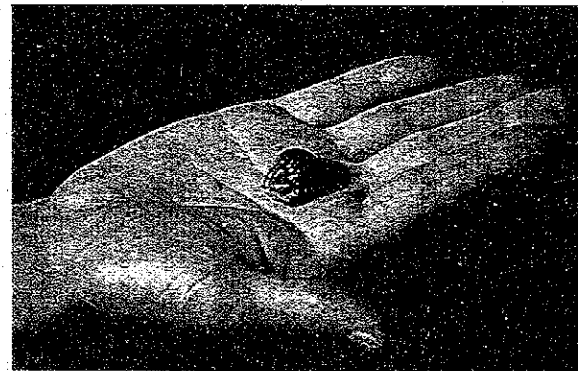
[治療]

村人たちとともに病気の牛を倒して検査をする隊員たち。
膨大な数の牛が生息するこの地域に、
獣医といえは2人の協力隊員が
いるだけである。



同じ地域で大農場を経営する白人入植者と、その牛。彼らはヨーロッパ産の乳牛や肉牛を何百頭と飼育している。それらの牛を直接飼っているのは白人に教育された黒人労働者たちなのである。あまりにも差が歴然としている。白人たちは2代目、3代目で大半が英国系である。ザンビア独立以前にはマザブカ地区に80家族ほどが住んでいたが現在は半数に減っている。世話行き届いており、牛には一匹のダニも付いていない

【白人入植者】



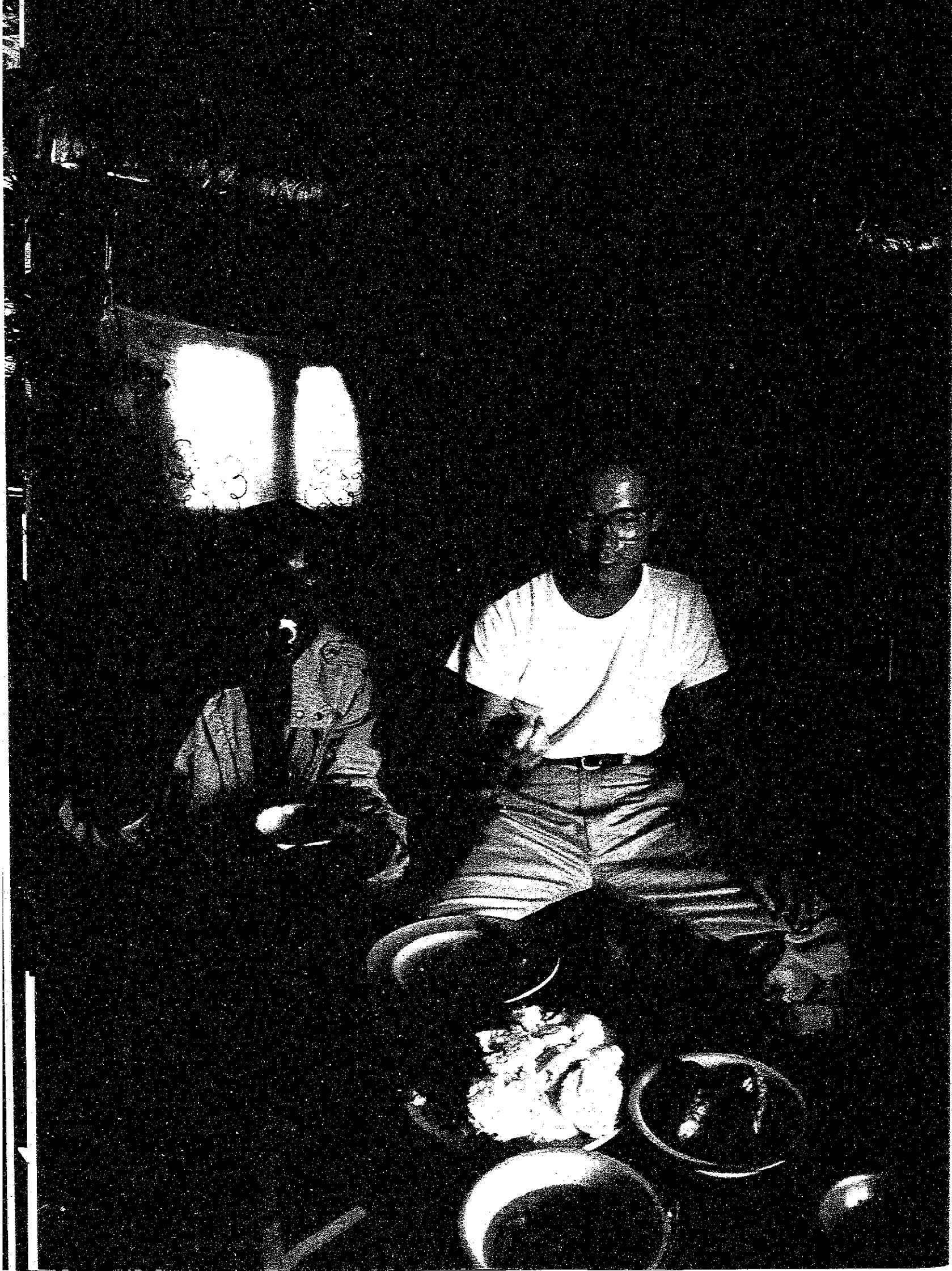
血を吸って太ったダニ。牛たちの死因の大半が、このダニが媒介するコリドール・ディーズというリンパ節のはれる病気であると考えられている

【ダニ】



【薬浴】

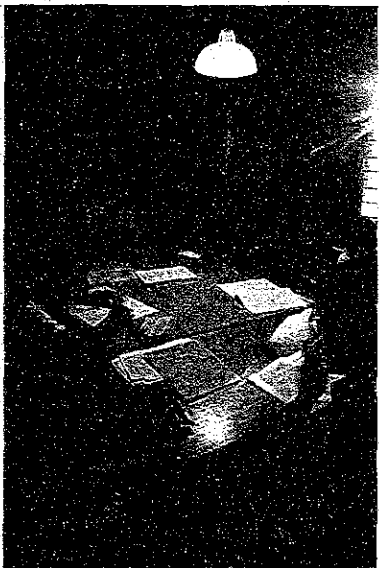
放牧されたブッシュでとりついたダニを駆除する唯一の方法は、薬液を張ったプールのなかを泳がせるディッピングである。週一度のディッピングを行えば完全に予防できるといわれるのに、村人たちはそれさえ行おうとしない





内陸性気候であるために朝夕は冷えこむ。
たき火で暖をとる家族とくっつく
獣医の木下隊員

【早朝】



【会議】

活動報告を行う。右より、木下秀俊(獣医師)、
岩下市蔵(家畜飼育)、ひとりおいて、
関谷孝(家畜飼育)、小林秀樹(獣医師)、
高田浩幸(社会学)の各隊員。画面中央は調整員の稲見廣政。
他に坂野太一(社会学、写真右
ニワトリを受取っている)がいる

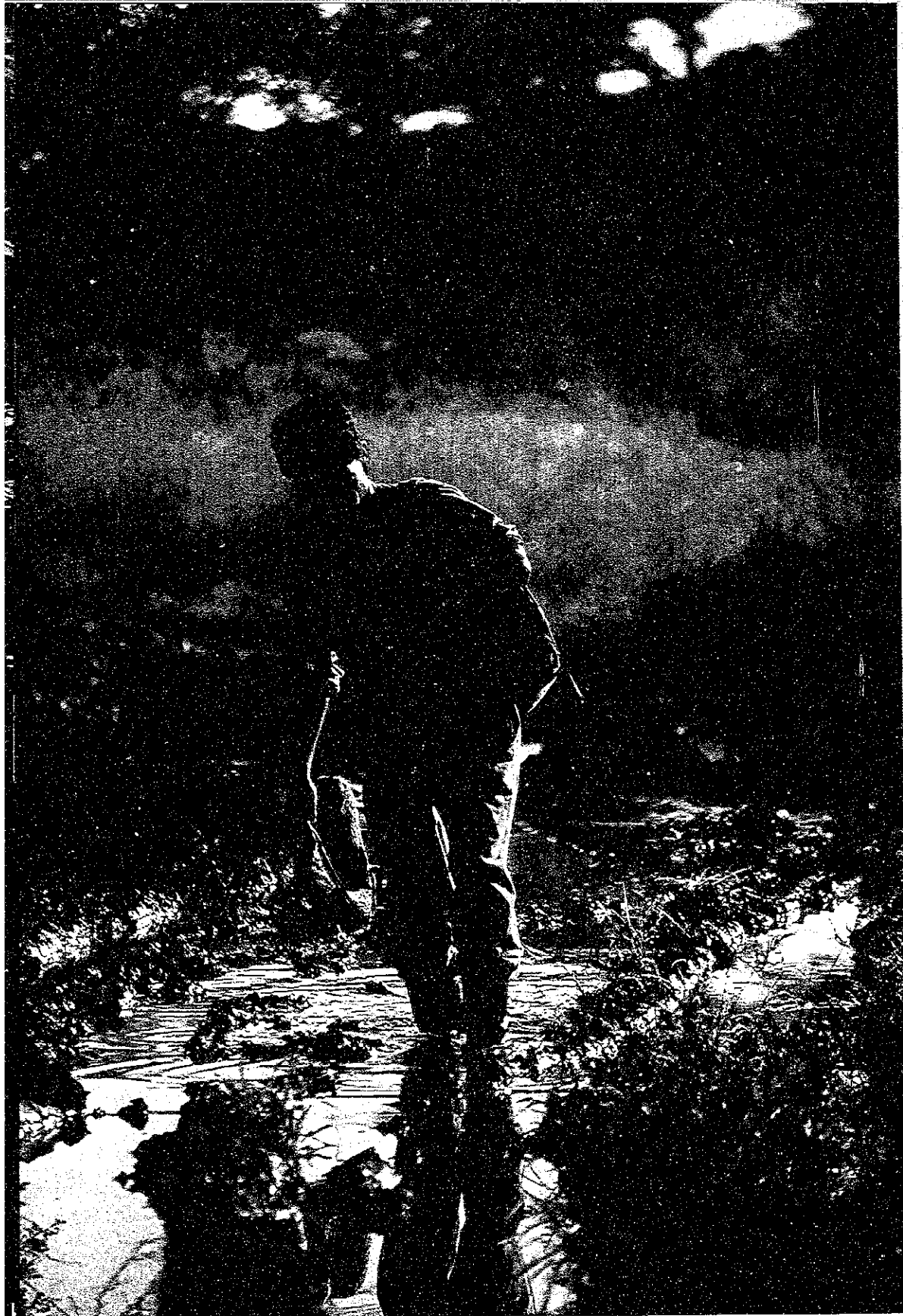
【食事】

(左)屋食を摂る高田隊員。テント生活を続けて
いる高田隊員は、この村人の家で睡ってもらっている。
ザンビア人の主食は、
トウモロコシの粉を練ったもので、
シマと呼ばれる。
高田隊員の食事は毎食がシマである



【報酬】

牛の無報酬治療(に対して、
感謝のしるしに差し出されたニワトリ。
隊員たちはその夜さっそく焼き鳥にした



【調査】

雨季のぬかるんだ裏道を、村落の調査に行く高田隊員。学生時代、ポーランド、イラン、フィリピン等に出かけ、激しく動いている社会を見てきたという高田隊員は、純然たる学問的な文化人類学のフィールド・ワークよりも、現在直面しているような、人々の生活基盤に密着した調査の方が面白いという。



●相互扶助

到着時刻も近くなって、あきらかにニジェール上空と思えた時、ふっと大地が現れた。「うわーっ赤い国！」それが、ニジェールと初対面した印象であった。高度を落としてゆく飛行機の中の窓越しに、その赤い大地をながめながら「私はここで何ができるのだろうか」とほんやりと考えていた。そして3カ月が過ぎた。この国の印象について、紙面上にはとうてい書ききれないのであるが、つれづれなるままに思いついた事を書き綴ってみたい。この国ではよくカドーという言葉が耳にする。カドーとは贈り物とかいう事を意味するわけだが、町を歩いていると、子供がカドーと言って手を出してくる。そのカドー攻撃はすさまじいものである。時には大人までがそうであり、最初はなぜそういう事を言うのだろうか、誇りとか、はずかしさとか、ないのだろうかと腹も立ったが、ここではそれがあたりまえ。富める者は貧しい者にほどこしをするのがあたりまえというイスラム的発想からきているようである。

私の知っているおばさんなどは、食事があまってしまった時などは必ず近所の貧しい人にあげたりしている。私にもよく食事を作ってくれ、遠慮していらないと、怒りだしてしまし、何か物をくれる時も沢山くれたりと太っ腹なのである。そのおばさんの家にも誰かが食事を(あまった物ではなくて)持って来てくれたりもする。それが普通であるから、日本人みたいに利益がどうのというせこい感覚はほとんどなく大らかである。そういう点ではなぜか日本の下町や田舎などによくみられる相互扶助の関係が多くみられるここ、ニジェールなのである。

いやな所もあることはあるがそれはまだ自分が日本的発想でそれを判断するからいやに思えるのであろうから、この紙面上には書かないことにする。

太田恵美・野菜(ニジェール)

●タコつぼの中から

私は今、小児病院の急救病棟で仕事をしています。仕事をしていたこのごろ、お母さん達に腹を立てたり、ケンカしたり、お母さん達からおしかりを受けることも多くなりました。でも、いつもいつも、ああ、腹を立てる相手がちがっているなど反省させられるのです。

小児医療において、母親は子供の命を左右する重要な存在です。母親の協力なしではこの小児看護は成り立ちません。日本に研修に行った看護婦さんが、日本のお母さん達は大変協力的で仕事がしやすい。しかし、バンガラはちがうと言っています。

バンガラでは、母親の無知のために(この病院に来るほとんどの人達は貧しく文盲)また、

医療側のレベルの問題として、指導能力がないために、お母さん達との関わり合いだけでも疲れはててしまう毎日です。例えば、隣の子はレントゲンをとったのに、うちの子はとってない。だからよくならないんだといって怒ってくるお母さん。採血すると、血が少ないのになにするんだと、邪魔して泣きわめくお母さん。今にも呼吸が止まりそうなのに、ムリやりミルクを飲ませてしまうお母さん。

1日、2日でよくなるからといって状態が悪い子供を家に連れて帰ってしまう親達。いろいろ事情はあるにせよ自主退院、無断退院が実に多いのです。今家に連れて帰ったら死んでしまう、と、何度、お母さん達に説明しても、説得してもなかなかわかってもらえません。

看護婦さん達は自分の言いたい事を高圧的に命令し、母親の言うことはほとんど無視します。医師は特にひどい。母親のいうことをいちいち聞いていたら、仕事にならないし、慢性の人手不足です。

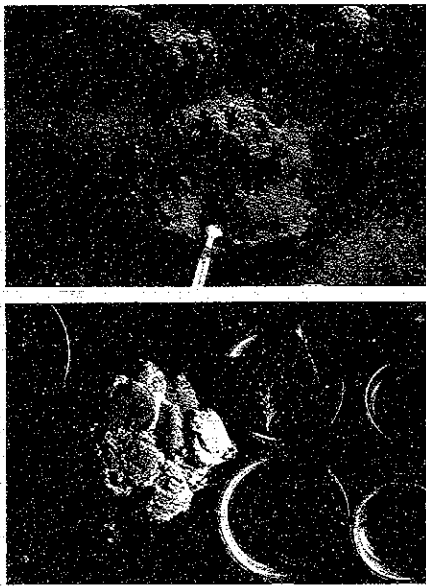
お母さん達は医療側に対し不満や不信感を持ち、医療側は、お母さん達をまったく、(医師は看護婦さえ信用していないのだから)ムリもありません)相手にせず、ましてお母さん達を指導してしまうなんて皆無といっていいし、それは仕事の範囲内ではないのです。

しかし、子供の状態を24時間身近で見ているのは母親であり貴重な情報提供者であり、一番の看護者であるお母さん達を無視することはできません。そして、もちろん彼女達を指導するのは医療者の仕事であり、もっとも重要なことのひとつなのです。

じゃあ、どうやったら指導体制がとれるのか、どのように指導していったらいいのか、そうした時、村の医療保健はどうなっているのか、お母さん達にどの程度まで要求できるのか……今の私には知らないことだらけです。知ったとしても、それは困難なことでしょう。でも知らないくせに何が言える。

任期も残りあとわずかのところで看護婦さん達への指導もままならず、今頃じたばたしても始まらない。自分の努力不足、力不足を呪うしかありませんが、今すこし、タコつぼから出て、タコつぼのこと考えてみなければと思うのです。

成田敦子・看護婦(バンガラデシェ)



(上)モロッコの家産料理、クスクス。大麥の粉を塩水でまぶし蒸したものを、それにタジンと呼ばれるシチューを混ぜて食べる。
(下)ザンビア人の主食シマ。トウモロコシの粉を練ったもので、東アフリカでは一般にウガリと呼ばれている

●730日の川柳

- 交差点 笑顔でせびる その子達
- 1年目 なんとかわかる フランス語
- 新入りの 心はすでに 帰国の日
- 思い出と 任斯数えて 年を取り
- 週末は 買物カゴに 夢をのせ
- お開きは ニジェール人の 愚痴になり
- 給料日 貸したお金の 回収日
徳浜元弘(ニジェール)

●幸せ者の私

フアッシュの高岡です。こんにちは。モロッコに来て、早くも1年数カ月。ますますモロッコが好きになる、今日この頃です。モロッコの音楽も、3秒くらいなら聞けるようになりました。日本にも、2枚くらい舌を持った人がいますが、こちらの人は10枚くらい舌を持っています。そして、ここではこのような人を正直者と言います。

モロッコ人は、おだてると、糸のきれた凧のようにどこまでも舞い上がり、ちょっと怒ると、先ほどの10枚の方が大活躍します。

モロッコ人は、責任という言葉をよく使います。普通、人に責任をおしつける、というような使い方がとても上手です。

モロッコ人はよく反省をします。他人の誤ちを皆でさわぎながら、反省をするのがとても上手です。

こんな良い人々と仕事ができる私は、なんて幸せ者なのかと思う今日この頃です。

高岡(モロッコ)

●大変

コッパーに遊びに行こうなんて考えてもいなかったのに、現地訓練はルアンシャになり都会暮らしをしました。

ホームステイ先には同い年の女性がいたので、いろんな話をすることができました。私生児を育てているのにびっくりしましたが、ザンビアではめずらしくないよ、と言っていました。今は別のすてきな恋人がいて幸せそうでした。私に、ザンビア人の恋人をつくれと言ってしつこかったのにはまいったけど彼女を含め、普通のザンビア人は自分の物と人の物の区別がつかないところもあり、物をくれと言うのを断ると「人種差別をするのか」と言ってくってかかる人もいてまいりました。ザンビア人とつきあっていくのは大変です。

一方、高等教育を受けた人とは、違和感なくつきあえます。ザンビア人の友達をつくるのは難しいと聞きましたが、2年のあいだには必ず、いい友達をつくろうと思っています。

コッパーをすっかり気に入ってしまったので、また遊びにいこうと思いますから、コッパーの方々、よろしく願いいたします。

戸田清美・薬剤師(ザンビア)